

「神の言を無にしない人生」

イザヤ書 第29章 13節～14節
マタイによる福音書 第15章 1節～20節

説教 岡村 恒牧師

私たちには豊かに神の言葉を味わって生きる人生が与えられています。主イエスが私たちに幸いな生き方をお示しになりました。

今から2000年前、パリサイ人と律法学者たちが主イエスの元にやってきました。彼らは神様についての専門家でした。主イエスが一体どういう存在かを見極めるためにやってきたのだと思います。彼らは主イエスの弟子たちの日常生活を見て、主イエスを非難し始めます。私たちも繰り返し同じ過ちを犯します。本当に自分の命を全部かけてよいのは主イエスのお言葉です。ところが、すぐに目の前の具体的なものに心を奪われてします。聖書の言葉よりも人の語る言葉や自分の判断に心を動かされます。

主イエスの弟子たちの内に汚れた手でパンを食べている者をパリサイ人たちは発見しました。当時では重大な律法違反です。ユダヤ人は神がお与えになった十戒を解釈していく過程で細かい規定を定めました。今日でも安息日に照明をつけると律法を犯すことになると思う人が、あらゆる電気機器が金曜日の日没から土曜日の日没まで作動しないように気を配ります。主イエスの弟子たちはパリサイ人に非難されました。

主イエスはここでイザヤ書29章を引用されました。「『この民は、口さきではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。』」（マタイによる福音書第15章8節）目の前でできごとに固執しているあなた方は、本当に神を信じ、崇め、敬っているのか。具体的な生活の中で支障が生じたときに、色々とはげ道を用意しました。父と母を敬うことに優先して神に捧げることは当然です。しかし実際には、神に捧げるという事を言い訳にして、父と母を敬う本来の律法を無視することが起こっていました。

主イエスは口先だけで神を拝む生活から解放しようとされました。私たちも同じ失敗を繰り返します。主イエスは私たちがそういう失敗の只中を歩んでいることをご存知です。私たち自身の力では神に従い続けることはできないことは明らかです。だからこそ、主イエスは私たちのために祈ってくださいました。

やがて弟子たちに聖霊が注がれたとき、彼らは神に結び付けられて生きるこの命が、何があっても取り去られることのない命であること

を知るようになりました。その時に彼らが語り始めた言葉があります。〈主イエスは救い主だ〉という証の言葉です。この日から私たちは聖霊によって、神の言葉に生きることができるようになりました。実際には繰り返し失敗を重ねます。神は私たちの不信仰をご覧になった上で、救いの約束を宣言されました。そして主イエスによって実現してくださいました。

神のひとり子が地上に来て、ただ1度きりその命を与え尽くしてくださいました。私たちを自由にするためです。もっとあなたの全身全霊を神の言葉にかけて生きて良い。主はそう言われます。聖書が語る救いは、私たちが自力で獲得するものではありません。神が一方向的に与えてくださる賜物です。ただ御子イエス・キリストを信じる信仰によって、あなたを生きるものにする、そう約束してくださった神の約束が本当のことになりました。

この日、パリサイ人や律法学者たちは、主イエスが一体どなたかが少しもわからなかったのです。その言っていることは少しも受け入れることができない。その弟子たちは律法を一生懸命守ることによって神に喜ばれようとしていない。今日でもこの関係は変わらないと思います。一方で律法、規律、自分で定めた決め事、社会の言い伝えを守ることによって豊かな人生を送りたいと願う人々であります。また一方で神の言葉を信じ、真の神がこの私を捉え、愛していることを知って生きる者たちであります。

主イエスは、私たちをすべての支配から解放して、神の元にだけおいてくださる救い主です。死も滅びも何者もキリストによる神の愛から私たちを引き離すことはできない。何者もというのは私たち自身の失敗や不信仰をも含みます。造り主の元で生きる。そこに自由があります。様々な誘惑や恐れから解き放たれて生きる自由です。その中で私たちは精一杯、神が与えてくださった人生を喜んで生きることが出来ます。そこには失敗もあり、困難にも直面し、様々な誘惑に翻弄されるかもしれません。しかし、主は言われます、私のものとして神の前で力強く自由に生きれば良い。神の約束の言葉が、私たち1人1人の人生を終わりまで永遠に支えます。

（記 説教要約奉仕者）